

野田秀樹作・演出『フェイクスピア』劇評

宮崎かすみ

『フェイクスピア』

NODA・MAP 第24回公演

作・演出：野田秀樹

日時：2021年5月24日～7月11日

会場：東京芸術劇場プレイハウス

出演：高橋一生 川平慈英 伊原剛志 前田敦子 村岡希美
白石加代子 野田秀樹 橋爪功

シェイクスピアの息子、フェイクスピア。

作品のタイトルロールであるこの役は、野田秀樹によって演じられる。本来、文学はフィクションであり、嘘が許されている言説空間である。しかし野田は、文学に許されているフィクション、嘘を、フェイクスピアという、いかがわしくて詐欺師のようにうさん臭いシェイクスピアの息子に体現させて、文学の嘘を痛烈に揶揄する。

そもそも、文学の言語がフェイクであってもいいはずなのに、これはなぜなのか？

おそらく、野田が文学の虚構性というカバーの陰で真に批判しようとしているのは、別な種類の言葉のはずなのである。

今の世に、いかに夥しい数の、真実の振りをした嘘の言説がまかり通っていることか。本来は、ノンフィクションという言説領域で、真実を伝えるのが使命であるはずの報道機関さえもが、虚構（＝フィクション）の言説を垂れ流している。

野田は、そこまで踏み込んだ言語で批判してはいない。しかし、劇中で、繰り返し歌われる「言ったが勝ち」というセリフ。このセリフが響き渡る空間において言葉は、真実を伝えるところからは遠く離れて、単に「言ったが勝ち」「書き込んだが勝ち」という、勝負と支配のツールに成り下がっている。自分に都合のいい主張を発し、その言葉によって世界を構築しようという野心と野望を持つ人たちの道具として、思うがままに利用されているのである。

あの神は、言葉によって世界を創造した。

「はじめに言葉ありき」

それを、薄汚く下卑た欲望に満ちた小子どもが都合よく模倣するかのごとく。彼らなりに、言葉で世界を思うがままに牛耳れることをよく了解しているのだ。

だが野田はその対極にある言葉の群れを見せてもくれる。それに対比されるのは、匣のなかに封印された神の言葉、真の言の葉である。その匣、ブラック・ボックスに閉じ込められていたのは、524 人の命を救うために、彼らを死なせないために、死闘の限りを尽くした人々が発した、真に迫った言葉だった。美しくもなければ、感動的でも詩的でもない。

「これはだめかもわからんね」

「どーんに行こうや」

こんな弱気の、身も蓋もないほど情けない本音がポロリと発せられる。あるいは空元気を奮いたたせるための空しいかけ声。しかしこれとて本心から出た言葉には違いない。真の言の葉、マコトノ葉である。ただただ、524 人の命を守ろうとして、彼らを生かそうとして、生と死のぎりぎりの境界線を彷徨う死闘のなかで発せられた言葉だ。美しくはないにしても、そこには嘘もなければ衒いもない。人を生かすための闘いに全身全霊を捧げた者らの口から出た赤裸々な言葉なのである。

現代の巫女、出来損ないのイタコを演じる白石加代子が召喚しようとしていたのは、36 年前の 8 月 12 日、あのコックピットで、そして客席で乗客を守ろうと必死に戦って逝った人々の魂であった。この作品は、1985 年 8 月 12 日、群馬県多野郡上野村御巢鷹山中に墜落した日本航空 123 便を操縦していた乗組員と犠牲となった乗員、乗客たちに捧げられていたのである。

舞台とは、虚構と現実の境界線が溶け、相互に浸食する空間である。それは、白石加代子の、「白石加代子です、女優をやっております」というリアルを伝える言葉から始まる。この舞台の言説は、真実なのだ、リアルなのだ、と主張することから始まる壮大なフィクション（＝嘘）であるこの演劇空間。嘘と真実は、自由に自在に、混じり合い、入れ替わり、相互に戯れる。真実であると主張し、真実である振りをする嘘＝虚構。近代の初頭において、小説はそのような種類の言説からなる文芸の一種として成立した。だから、小説、文学、そして演劇というのは、この虚構性が許される特殊にして唯一の場であるはずなのだ。

それなのに、野田は、自らをフェイクスピアと称し、その言葉を詐欺師、セールスマンの営業トークと同じレベルに貶める。野田は、自らをそこまで墮し、文学の言葉をそこま

で辱めた。シェイクスピアさまが、怒り心頭で降臨されるのもむべなるかな。真に憤っているのは、無払いのロイヤリティのことなんかではない。ひとり文学にのみ許された虚構性という特権をかなぐり捨てて、世界を言葉によって築き上げようとする自らの身にも情け容赦なく鞭を当てているのである。

野田は、そこまでして何をしようとしているのか。自分の首を絞めるようなことを、なんのためにするのか。野田が自らの身を投げ打ち、文学的言語のすべてを危険な淵に陥れてまで言葉の虚構性を告発する、この暴挙とも言える営みによって浮かび上がってくるのは、2021年の日本の言説空間に充満し、悉くすべての言葉をむしばむ虚構性である。それはむろん、マスコミが日々絶え間なく生み出し、SNS上に飛び交う無数の言説を含む。ことに、事実を報道する、と謳いながらも、虚構を垂れ流し、嘘に塗れた言葉で世界を創り上げようとするマス・メディアの言説を。

「私は白石加代子です」、という白石加代子の口上で始まりながらも、嘘の言説空間を繰り広げる『フェイクスピア』という作品世界は、事実を報道すると言いながら虚構を垂れ流しているメディア全般の鏡像であると同時に、それに対する痛烈な批判でもあろう。

36年前のあの暑い夏の日、コントロール不能となった飛行機との格闘のなかで発せら



©NODA・MAP 第24回公演「フェイクスピア」作・演出：野田秀樹 撮影：篠山紀信
(本誌巻頭004ページにカラーで掲載)

れた真の言の葉、マコトノ葉の放つ、痛ましくも胸を締めつけるようなあの切実さ、誠実さが、現代日本の薄汚れた言説空間にあって、神々しいまでの鮮やかさをもって劇中で蘇る。語られた言葉、目には見えない真実の言葉の群れ。発せられたその刹那、消えゆく宿命にある言の葉ども。マコトノ葉。しかしそれらをも書きとめなければならない。橋爪演じる楽は最後にそう呟いた。

書きとめることで、後世へ、未来へと繋いでゆかねばならないのだ。それが、文学の営みである。確かにそれは虚構の言説ではある。だが、フェイクスピアの父、シェイクスピアこそ、重層的な意味と象徴が織りなす秘儀にも似たこの言語を駆使し、文学言語にのみ許された虚構性という特権を誇らしくも勝ち取った言葉の帝王であった。できそこないの息子、フェイクスピアと同じほどに劣化した現代に生きる私たちではあるが、そんな者にもブラックボックスからよみがえったかのような、聖なる言葉の一瞬の煌めきと意味の炸裂を感知できる瞬間は、確かにあった。

これぞ、文学的言語の勝利。評者は、心からの喝采と賞賛を野田秀樹と、演じた俳優たち、舞台制作に携わったすべての人たちに捧げる。

(2021年7月5日 観劇)